

No. 1407

鈴木首相訪欧の旅

— 第 二 報 —

日本とヨーロッパの新しい対話を求めて欧州共同体（EC）六ヶ国を訪問した鈴木首相一行は、6月15日ベルギーへ。ブリュッセルのEC本部でトルン委員長らと会談した首相は、自由貿易体制への支持をとりつけた。ロンドンのダウニング街にある首相官邸で、にこやかに出迎えるサッチャー、イギリス首相。サッチャー首相は、「日本はもっと市場を開放してほしい」と強く求めた。これに対し、鈴木首相は「日本は欧州で考えられている程、閉鎖的ではない」と反論。

翌18日オランダのファンアフト首相と会談。オランダ側は、日本製品の対欧輸出が急増し、日欧間が緊張している」と指摘、鈴木首相も「日本としては集中豪雨的な対欧輸出は避けるが、欧州側も対日輸出努力を強めるように」と述べた。フランスのミッテラン新大統領との会談では、フランス左翼政権の対外政策を探ることに最重点を置いたが、フランスはNATOの一員として西側諸国との関係を優先するとの基本姿勢を示した。EC諸国首脳との一連の会談を終えた鈴木首相は内外記者会見で「日本を理解してもらえた」と語ったが、昭和48年の田中首相以来8年ぶりの日本の首相のヨーロッパ訪問に、各国の反応は好意的だったようだ。

インドシナ難民

安住の地を求めて

祖国を捨てたインドシナ難民31人が安住の地を求めて6月30日成田空港についた。昭和50年以来、様々な形で日本にやってきたベトナム、ラオス、カンボジアの難民は5,000人を越えているが日本定住の難民は意外に少ない。昭和54年の閣議決定から定住のワクが拡げられたが現在約670人がすでに定住したり、希望しているに過ぎない。定住を希望する難民は神奈川県大和市と兵庫県姫路にあるふたつの定住促進センターで日本語の集中教育と生活指導を受ける。大和市にある定住センターでは、すでに287名の難民を日本の社会へ送り出しており、現在129人が教育を受けている。難民共通の悩みはなんといっても日本語のむずかしさだ。3ヶ月の研修期間は短い。それでも日常会話程度はできるようになるという。日本の社会で生活する上で生活習慣の指導も大切なことのひとつだ。センターの生活は1人1日900円が支給される、しかし食費と共益費を引かれると手もとには300円しか残らない。衣類や日用品はボランティアの人々によるといっても楽ではない。6月27日にはセンターで11回目の日本語教育修了式が行われた。この日17人4家族が日本の職場や学校でそれぞれの人生の再スタートを切った。身体の不自由なカンボジアのロー・ソー・キムさん（26才）もそのひとりだ1975年政変以来苦難の連続の長い道のりだったという久しぶりの故国の歌とおどりで別れのさびしさをまぎらわす難民たち、ことばや習慣のちがう日本の社会に出て真の意味での安住が得られるのだろうか。難民たちが日本人に同化するにはまだまだ時間がかかりそうだ。